

# 日本語版 The Passive Aggression Scaleの作成および信頼性と妥当性の検討

Development and Evaluation of the Reliability and Validity of a  
Japanese Version of the Passive Aggression Scale

重藤 彩伽・Young-Ok Lim・Kyung-Hyun Suh・住岡 恭子  
SHIGETOU, Ayaka・Young-Ok Lim・Kyung-Hyun Suh・SUMIOKA, Kyoko

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要  
第60号 2025年12月 拠刷  
Journal of Humanities and Social Sciences  
Okayama University Vol.60 2025

## 日本語版The Passive Aggression Scaleの作成および信頼性と妥当性の検討

重藤彩伽\*・Young-Ok Lim\*\*・Kyung-Hyun Suh\*\*・住岡恭子\*\*\*

### 問題と目的

#### 受動的攻撃とは

他者に危害を加えるという直接的な意図をもって行われるあらゆる行為を攻撃性 (aggression) という (Bushman & Graig, 2001)。攻撃性は観察可能な行動であり、考えや感情ではないという見解がある (Allen & Anderson, 2017)。本研究ではこの知見に基づいて、攻撃性は攻撃行動を観察することで測定できるものと解釈する。攻撃性の1つである受動的攻撃は「消極的」な攻撃行動であり、何かを「しない」「与えない」「忘れる」といった拒絶的な態度によって怒りや敵意を間接的に表現する (片田, 2012) 手法である。受動的攻撃と近い概念として間接的攻撃や関係性攻撃がある。間接的攻撃は、加害者の意図が分からぬようない方法を用いる攻撃 (Lagerspetz et al., 1988) である。関係性攻撃は、仲間関係を操作することによって相手に危害を加えることを意図した攻撃である (Crick & Grotpeper, 1995)。攻撃の形式に注目すると、受動的攻撃は相手に直接的に危害を加えようとしないという点において関係性攻撃と同様に間接的攻撃に含まれると考えられる。APA心理学大辞典 (VandenBos, 2007 繁栄・四本訳 2013) によると、受動的攻撃は一見あたりさわりなく偶発的かつ中立的であるが、実際は無意識の攻撃的動機が間接的に反映されているという特徴のある行動である。例えば学校に行かなければならぬことに対する無意識的な憤りは、バスを乗り過ごしたり、宿題を忘れてきたりといった行動によって表現される (VandenBos, 2007 繁栄・四本訳 2013)。以上から、受動的攻撃は間接的に相手に敵意を示すという怒りの表出の形式的側面において間接的攻撃、関係性攻撃と共通するが、無意識に取った行動や力動的側面にも注目されているという点にそれらとの違いがあると考えられる。そのため本研究では、受動的攻撃を、「意図的かどうかにかかわらず、ストレスに対する反応として怒りや敵意を間接的に表出する行動」と定義する。

受動的攻撃という用語は、過去には人格特性を表す言葉としても使用してきた。受動的攻撃は、もともと第二次世界大戦中の米軍において権威者に対する反対の意を公然と直接的に表すのではなく、間接的に「疎外する」形で表現した軍人を表すために使用された概念であった (Millon, 1993)。

\* 岡山大学大学院社会文化科学研究科

\*\* Department of Counseling Psychology, Sahmyook University

\*\*\* 岡山大学学術研究院社会文化科学学域（文）准教授

受動的攻撃性人格障害は初版の DSM に掲載された (American Psychiatric Association, 1952) が、DSM-IV では概念の範囲が広がって否定的人格障害と改名され (Hopwood & Wright, 2012)、DSM-IV-TR 「今後の研究のための基準案と軸」 の中にその基本的特徴や行動様式が記載されることとなった (American Psychiatric Association, 2000 高橋・大野・染矢訳 2004)。その理由には改訂の中で受動的攻撃の概念が実質的な独自性を失っていたこと (Schanz et al., 2021) や、受動的攻撃の行動様式はしばしば、境界性、演技性、妄想性、依存性、反社会性、および回避性人格障害を持つ人に生じるとされていること (American Psychiatric Association, 2000 高橋・大野・染矢訳 2004) が原因として挙げられる。このように受動的攻撃性人格障害の行動様式は他の人格障害の一症状にすぎないと捉えられたため、診断基準から消去されたと考えられる。DSM-5には受動的攻撃に関する特記事項はなく (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)、受動的攻撃という概念は現在の精神障害の診断システムから外されている。

しかし先行研究では受動的攻撃が及ぼす悪影響や予測する病理性についていくつかの示唆がなされており、その影響は様々な場面で垣間見えている。Pretzer & Beck (1996) は、受動的攻撃を不正に他者から操作されたり妨げられたりした、歪んだ概念がベースとなった病的な反応であると捉えている。Schanz et al. (2021) は、受動的攻撃は子ども時代の否定的経験から生じた機能不全的なモニタリングや評価プロセスの結果であり、精神病理学および対人葛藤の要因と結果の両方であるとしている。さらに、その否定的で秘密主義的な性質から受動的攻撃は未熟な防衛機制としても捉えられている (Andrews et al., 1993)。Baykara & Alban (2018) の研究では、未熟な防衛機制は自傷行為および自殺企図の既往歴がある患者により頻繁に用いられており、なかでも受動的攻撃は自傷行為歴を予測することが明らかになっている。Murphy & O'Leary (1989) は、受動的攻撃について能動的かつ身体的な攻撃の前兆であると評価した。以上のように受動的攻撃は直接的に生命を脅かしたり、あからさまな敵意を示したりするものではない。しかしながら一見すると攻撃とは思われないような行動によって、人間関係やコミュニケーションになんらかの悪影響を及ぼすものであるといえる。同時にこのような消極性を持ち合わせる特徴的な攻撃手法ゆえ、悪意にもとづく行為だと決めつけられないところに受動的攻撃の巧妙さがある (片田, 2012)。さらに、受動的攻撃性のパターンは、ほとんどあらゆる種類のパーソナリティ構造の人を特徴づけていると指摘される (McWilliams, 1994 神谷・北村訳 2005) ように、精神障害の診断システムから外されたとしても受動的攻撃はその背景にあるパーソナリティを推察する点において看過すべきものではないだろう。

### 受動的攻撃の測定方法

先述したように受動的攻撃は診断基準から外されており、その研究の数も他の攻撃性についての研究と比較すると少ない。受動的攻撃性に関する研究の意義が提唱されている一方で受動的攻撃行

動に関する研究は少ないため、理論の数が少なく心理測定テストが不足しているとの示唆もある (Parrott & Giancola, 2007)。受動的攻撃を測定する評価ツールには現在、Schanz et al. (2021) による Test of Passive Aggression (以下 TPA) と Lim & Suh (2022) による The Passive Aggression Scale (以下 PAS) の2つがあり、どちらも自記式による質問紙である。

TPAは、受動的攻撃行動を「内的または外的なストレス要因に反応して、不作為によって自己または他者に危害を加えようとする安定した行動傾向」と定義し (Schanz et al., 2021)、受動的攻撃行動を自己指向と他者指向に分けて測定する構成となっている。先述の通り受動的攻撃は抑うつ傾向や自殺との関連も言及されている (Baykara & Alban, 2018) ことから、自己に向かう受動的攻撃の測定はいくつかの精神症状を予測することに役立つだろう。しかし、Lim & Suh (2022) は TPAの因子は受動的攻撃の方向性は測定できるが、受動的攻撃行動をタイプ別に分類していないことに言及した。さらに測定指標の不明瞭な因子構造が受動的攻撃を概念化する際の限界の1つと捉え、受動的攻撃行動を正確に測定し、行動のタイプによって受動的攻撃の概念を明確にすることを目的にPASを作成した (Lim & Suh, 2022)。PASは「批評の誘発」「回避・無視」「サボタージュ」の3つの因子によって受動的攻撃行動を評価することができる。韓国人を対象とした調査によって信頼性と妥当性が確認されており、臨床および学術現場で受動的攻撃行動やそれに関わる性格を測定するための有用なツールであるとされている (Lim & Suh, 2022)。本研究ではPASの日本語版を作成し、その内的一貫性、基準関連妥当性、構造的妥当性および再検査信頼性を検討する。先述の通り、本研究では攻撃性は攻撃行動に表出するものとして捉えるため、本尺度では行動面から受動的攻撃を測定できると考えられる。日本語版PASの作成により、本邦においても受動的攻撃の正確な測定に近づくことができれば、攻撃性を背景とした行動についての検討が深まることが期待される。

## 研究1

研究1では、PASの日本語版項目案を作成し、項目表現のわかりやすさを検討する。

### 翻訳の手続き

Lim & Suh(2022)の作成した21項目を日本語に翻訳した。翻訳に際しては、ISPOR タスクフォースによる報告書 (Wild et al., 2005) およびこれに準拠した尺度翻訳のガイドラインである「尺度翻訳に関する基本指針」(稻田, 2015) にのっとって行った。まず、原著者の一人である第3著者から邦訳の許可を得た。原版の項目は韓国語で作成され、英訳された項目も併記されていたため、第1著者と第4著者それぞれが英訳された項目を日本語訳し、加えて2つの翻訳会社に韓国語版の日本語訳を依頼した。4つの日本語訳の項目を1つずつ第1著者と第4著者で精査し、日本語版項目を確定した。その後翻訳業者に依頼して英語へのバックトランスレーションを行い、第3著者が原版と齟

翻訳が無いかを確認した。

### 項目表現のわかりやすさの検討

**手続きと調査協力者** 調査は Google Forms を利用してオンラインで実施した。調査時期は2023年6月末～7月上旬であった。大学講義の時間を利用して調査への協力を呼び掛けた。加えてスノーボールサンプリングによっても協力者を募集した。その結果、大学生199名の協力が得られた。このうち、後述の不誠実回答検出項目に誤答した者を除いた168名（男性74名、女性92名、その他2名；平均年齢 $19.07 \pm 1.02$ 歳）のデータを分析対象とした。

**調査項目** (a) デモグラフィック変数：年齢（数値で記入）、性別（男性or女性orその他から選択）を尋ねた。(b) PAS 日本語版のわかりやすさを尋ねる項目：日本語訳した21の項目について、「1. 非常にわかりにくい」から「6. 非常にわかりやすい」の6段階評定で回答を求めた。(c) 不誠実回答検出項目：Maniaci & Rogge (2014) を参考に、選択肢を指定する項目（必ず「非常にわかりにくい」を選ぶよう指示）を (b) の回答途中にランダムで1問表示されるように設定した。

**倫理的配慮** 調査協力者募集の際に、研究の趣旨と調査方法、回答が任意であり中断が可能であること、協力しないことでの不利益が生じないこと、結果は統計的に処理され個人が特定されることはないことを記載した説明文書をデータ配布し、同意欄にチェックをつけた者のみに調査を実施した。

### 結果と考察

項目のわかりやすさの平均値と標準偏差を求めた (Table 1)。項目全体の平均値は4.97、標準偏差は1.15であった。各項目の平均値もすべて理論的中間点の3.50より高かった。翻訳の手続きにより項目は原版と同じ意味内容に翻訳されており、わかりやすさの平均値の高さから各尺度の内容的側面の妥当性が確かめられた。

Table 1 項目の分かりやすさの平均と標準偏差

項目	平均 ( <i>M</i> )	標準偏差 ( <i>SD</i> )
<b>全項目</b>	<b>4.97</b>	<b>1.15</b>
<b>F1 批評の誘発</b>		
PAS 1 嫌いな人や不快な人の長所を褒めるふりをしながらも、その人の弱みをほのめかす。	4.36	1.25
PAS 2 嫌いな人や不快な人のイメージを傷つけるために、その人のミスを立場が上の人に告げ口する。	5.58	0.63
PAS 3 嫌いな人や不快な人の恥ずかしい出来事や暗い過去を意図的に暴露する。	4.86	1.11
PAS 4 嫌いな人や不快な人を困らせるために、人前でその人が答えられない質問をする。	4.81	1.19
PAS 5 嫌いな人や不快な人を、冗談を装った皮肉を使って馬鹿にする。	5.17	1.08
PAS 6 嫌いな人や不快な人に言いたいことを、その人の目の前で他の人に話す。	5.06	1.09
PAS 7 嫌いな人や不快な人を困らせるために、被害者のふりをする。	4.56	1.28
<b>F2 回避・無視</b>		
PAS 8 嫌いな人や不快な人とは、わざと目を合わせないようにする。	5.39	0.88
PAS 9 嫌いな人や不快な人に出会ったら、意図的にその人から離しようとする。	4.85	1.12
PAS 10 嫌いな人や不快な人とは、その人が自分と連絡を取り、近況を知りたがっていると分かっていてもつながりを切る。	5.42	0.90
PAS 11 嫌いな人や不快な人がスマフォで連絡を取ろうとしてきた時、わざと無視する。	5.18	1.02
PAS 12 嫌いな人や不快な人は、無言でやりすごす。	5.63	0.62
PAS 13 嫌いな人や不快な人にSNSで質問をされたら、はなからその質問を見てないふりをする。	4.25	1.27
PAS 14 嫌いな人や不快な人に対して、冷たく軽蔑的な態度をとる。	4.96	1.14
<b>F3 サポートージュ</b>		
PAS 15 嫌いな人や不快な人を困らせるために、わざともたもた仕事をする。	4.53	1.39
PAS 16 嫌いな人や不快な人を手伝うふりをして、陰でその人の仕事を妨害する。	4.97	1.01
PAS 17 嫌いな人や不快な人と一緒に仕事をするとき、意図的に自分の役割を果たさず損害を与える。	4.57	1.23
PAS 18 嫌いな人や不快な人には、「忘れていた」などの言い訳をする。	4.65	1.26
PAS 19 嫌いな人や不快な人から頼まれた仕事を、わざと先延ばしにする。	5.09	1.10
PAS 20 嫌いな人や不快な人から頼まれた仕事をきちんと行わずに、後で「重要なことだとは知らなかった」など	5.52	0.68
PAS 21 嫌いな人や不快な人から頼まれた仕事をきちんと行わずに、後で「重要なことだとは知らなかった」などの言い訳をする。	4.90	1.15

## 研究2

研究2では、日本語版PASの内の一貫性、構造的妥当性、基準関連妥当性、および再検査信頼性を検討する。

### 方法

**手続きと調査協力者** アイブリッジ株式会社Freeeasyのアンケートをオンラインで実施し、モニターに回答を求めた。調査時期は2023年11月下旬から12月上旬であった。その結果、900名の協力が得られた。このうち、不誠実回答検出項目への誤答者を除いた704名（男性365名、女性336名、その他3名；平均年齢 $44.9 \pm 13.80$ 歳）のデータを分析対象とした。

**調査項目** 以下の通り尋ねた。(c)、(d)、(e)は、日本語版PASの基準関連妥当性を確認するための尺度である。(a) デモグラフィック変数：年齢（数値で記入）、性別（男性or女性orその他から選択）を尋ねた。(b) The Passive Aggression Scale日本語版21項目：研究1で作成した項目に対し、「1. 全く当てはまらない」から「6. 非常によく当てはまる」の6段階評定で回答を求めた。(c)「間接的攻撃」を測定する10項目：Lim & Suh (2022) のPAS作成において、攻撃性を測定するHostility-Guilt Inventory（以下 HGI；Buss & Durkee, 1957）の韓国版であるBuss-Durkee Hostility Inventory (Hong & Roh, 1983) のうち「間接的攻撃性」の項目が妥当性の検討に用い

られていた。そのため本研究では、HGIを中心として作成された攻撃性を測定する尺度である敵意的攻撃インベントリー（秦, 1990）から「間接的攻撃」を測定する10項目を使用した。自身についてどの程度あてはまるかについて、「1. ちがう」「2. 少しちがう」「3. どちらともいえもない」「4. 少しそうだ」「5. そうだ」の5段階評定で回答を求めた。(d) 「受動的攻撃性パーソナリティ障害」を測定する14項目：Lim & Suh (2022) のPAS作成において、パーソナリティ障害特性を測定する Minnesota Multiphasic Personality Inventory Personality Disorder Scale (Park et al., 1991) のうち、受動的攻撃性パーソナリティ障害に関する項目が妥当性の検討に用いられていた。そのため本研究では、Morey et al. (1985) を参考に新日本版MMPI (MMPI新日本版研究会, 1993) から抜き出した、受動的攻撃性に関わるパーソナリティの特性や受動的攻撃性パーソナリティ障害を測定する14項目を使用した。自身についてどの程度当てはまるかについて、「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の5段階評定で回答を求めた。(e) 「未熟な防衛機制」を測定する24項目：Lim & Suh (2022) のPAS作成において、防衛機制を測定するDSQ (Defense Style Questionnaire ; Bond et al., 1983) の下位尺度である「未熟な防衛機制」のうち5項目が妥当性の検討に用いられていた。そのため本研究では、中西 (1998) が作成した日本語版DSQ42から、未熟な防衛（投影、受動攻撃、行動化、隔離、価値下げ、自閉的空想、否認、置き換え、解離、分裂、合理化、身体化）を測定する24項目を使用した。自身についてどの程度あてはまるかについて、「1. 私に全然当てはまらない」から「9. 私に全く当てはまる」の9段階評定で回答を求めた。(f) 不誠実回答検出項目：上記の心理尺度に加え、オンラインでの調査であることを鑑みて、不誠実回答を検出するための項目を2つ挿入した。1つ目は増田他 (2019) を参考に、調査の回答開始前に真面目に回答するという宣誓を回答者に求める冒頭宣誓であった。2つ目はManiaci & Rogge (2014) を参考に、選択肢を指定する項目（必ず「非常によく当てはまる」を選ぶよう指示）を（b）の回答途中にランダムで1問表示されるように設定した。

**倫理的配慮** 研究1と同様の配慮に加え、調査に先立ち、岡山大学大学院社会文化科学研究科・法務研究科倫理審査委員会の審査を受け承認を得た。（受付番号：社\_2023\_11）。

**分析計画** まず、PASの21項目が原版通りの3因子構造となることを確かめるために確認的因子分析を行い、Cronbachの $\alpha$ 係数と因子間相関の算出から内的一貫性を確認した。次に各因子から下位尺度得点を算出し、「間接的攻撃」、「受動的攻撃性パーソナリティ障害」、「未熟な防衛機制」それぞれの変数との相関分析から基準関連妥当性を検討した。さらに、回答者のうち465名（男性228名、女性237名、その他0名；平均年齢 $45.4 \pm 13.4$ 歳）の5ヶ月後の日本語版PASへの回答から、再検査信頼性を検討した。最後に、原版が作成された韓国との間の文化差の可能性を検討するために、Lim & Suh (2022) の408名（男性172名、女性236名）のデータとの比較分析を行った。確認的因子分析にはIBM SPSS Amos ver.26を使用し、その他の分析には統計ソフト HAD ver.18（清水, 2016）を使用した。

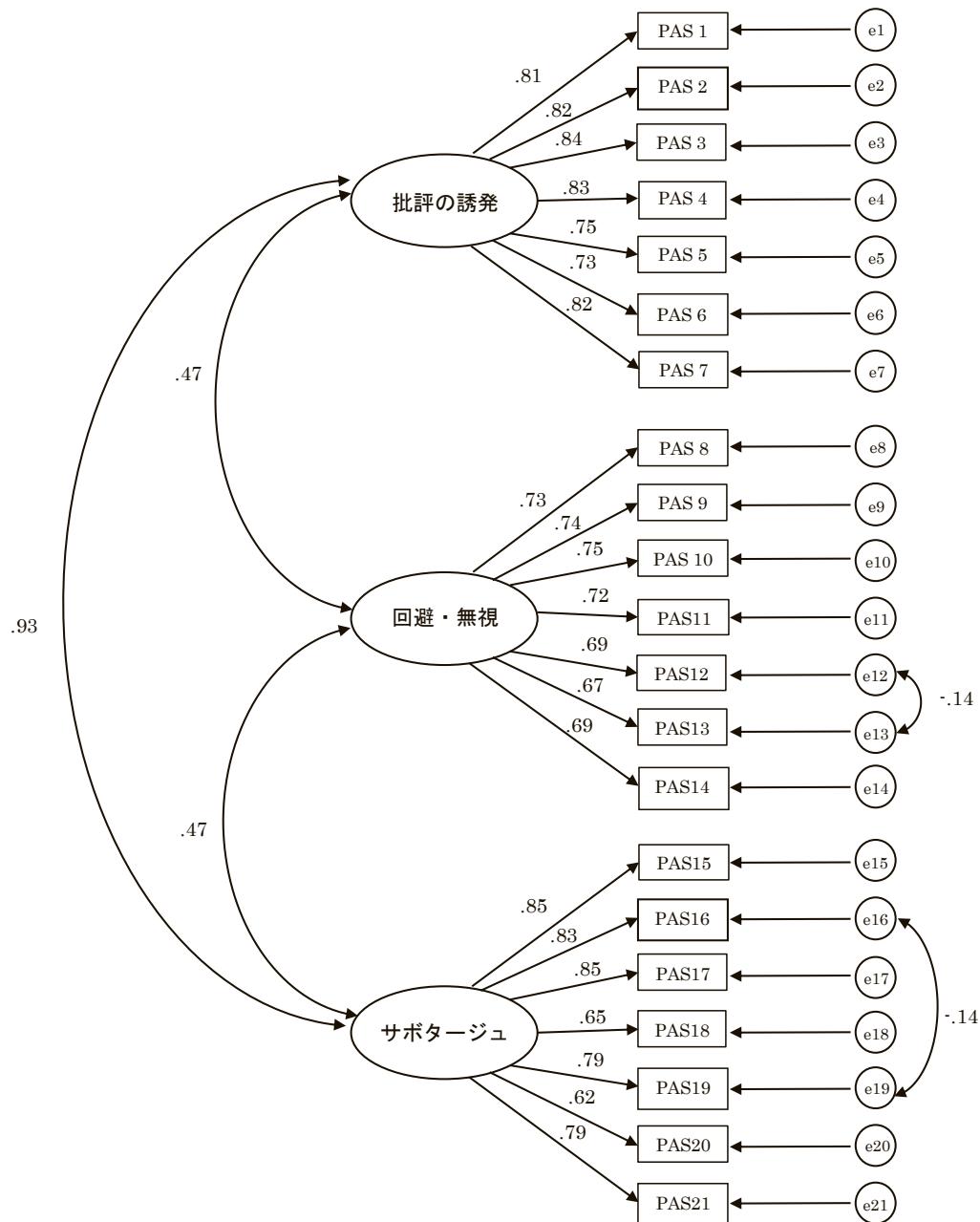
## 結果

**3因子構造の確認的因子分析** 原版に従った3因子構造での確認的因子分析の結果、誤差共分散を仮定しないモデルの適合度指標は $\chi^2=1010.18$  ( $df=186$ ,  $p<.01$ ) , CFI=.92, RMSEA=.08, SRMR=.09であった。原版では2つの誤差共分散（項目12と項目13、項目16と項目19）を許容した上で適合度を再分析していたため、同様の操作を行った。その結果、適合度指標は $\chi^2=991.29$  ( $df=184$ ,  $p<.01$ ) , CFI=.92, RMSEA=.08, SRMR=.09となった（Figure 1）。因子負荷量の範囲は、「批評の誘発」が.73から.84、「回避・無視」が.67から.75、「サボタージュ」が.62から.85であった。

Cronbachの $\alpha$ 係数は、「批評の誘発」 $\alpha=.92$ , 「回避・無視」 $\alpha=.88$ , 「サボタージュ」 $\alpha=.91$ であり、十分な内的一貫性が確認された。「批評の誘発」と「回避・無視」の因子間相関は $r=.47$ 、「回避・無視」と「サボタージュ」の因子間相関は $r=.47$ であり、原版（それぞれ $r=.35$ 、 $r=.54$  ; Lim & Suh (2022)）と同様の値であった。「批評の誘発」と「サボタージュ」の因子間相関は $r=.93$ であり、原版の $r=.61$  (Lim & Suh, 2022) より大きい値を示した。

**2因子構造の探索的因子分析** 「批評の誘発」と「サボタージュ」の因子間相関が高いことから、日本語版PASの因子構造が原版とは異なることが懸念されたため、あらためて当初は分析計画として想定していなかった探索的因子分析を行った。スクリープロットからは固有値の減衰状況が10.13、3.01、0.79、0.71、0.62…、という結果が示され、固有値の減衰状況や固有値1以上の基準でみると2因子解が適当と考えられた。そのため2因子を仮定して、最尤法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の因子負荷量と因子間相関、および各因子の $\alpha$ 係数と $\omega$ 係数をTable2に示す。

Figure 1 日本語版 PAS の構造モデル (3因子)



注) 図中の PAS1～PAS21の項目内容はTable 1における PAS1～PAS21と対応したものである。

Table 2 日本語版PAS 2因子構造の探索的因子分析の結果（最尤法・Promax回転）

項目 (n=18)	F1	F2	共通性
<b>F1 妨害・批判 (<math>\alpha=.95, \omega=.95</math>)</b>			
PAS 16 嫌いな人や不快な人を手伝うふりをして、陰でその人の仕事を妨害する。	.90	-.15	.72
PAS 17 嫌いな人や不快な人と一緒に仕事をするとき、意図的に自分の役割を果たさず損害を与える。	.87	-.07	.71
PAS 4 嫌いな人や不快な人を困らせるために、人前でその人が答えられない質問をする。	.86	-.08	.70
PAS 15 嫌いな人や不快な人を困らせるために、わざともたもた仕事をする。	.85	-.06	.69
PAS 3 嫌いな人や不快な人の恥ずかしい出来事や暗い過去を意図的に暴露する。	.83	-.01	.68
PAS 7 嫌いな人や不快な人を困らせるために、被害者のふりをする。	.82	.00	.67
PAS 2 嫌いな人や不快な人のイメージを傷つけるために、その人のミスを立場が上の人にはげ口する。	.78	.06	.65
PAS 1 嫌いな人や不快な人の長所を褒めるふりをしながらも、その人の弱みをほのめかす。	.77	.04	.62
PAS 21 嫌いな人や不快な人から頼まれた仕事をきちんと行わずに、後で「重要なことだとは知らなかつた」などの言い訳をする。	.72	.05	.56
PAS 6 嫌いな人や不快な人に言いたいことを、その人の目の前で他の人に話す。	.68	.08	.52
PAS 5 嫌いな人や不快な人を、冗談を装った皮肉を使って馬鹿にする。	.66	.16	.55
<b>F2 回避・無視 (<math>\alpha=.88, \omega=.88</math>)</b>			
PAS 9 嫌いな人や不快な人に出会ったら、意図的にその人から離れようとする。	-.16	.85	.63
PAS 10 嫌いな人や不快な人とは、その人が自分と連絡を取り、近況を知りたがっていると分かっていてもつながりを切る。	-.04	.77	.57
PAS 8 嫌いな人や不快な人とは、わざと目を合わせないようにする。	-.05	.77	.56
PAS 12 嫌いな人や不快な人は、無言でやりすごす。	-.12	.75	.50
PAS 11 嫌いな人や不快な人がスマフォで連絡を取ろうとしてきた時、わざと無視する。	.23	.60	.53
PAS 13 嫌いな人や不快な人にSNSで質問をされたら、はなからその質問を見てないふりをする。	.17	.56	.41
PAS 14 嫌いな人や不快な人に対して、冷たく軽蔑的な態度をとる。	.32	.54	.54
因子間相関	F1	—	.42
	F2	—	

第1因子は、「嫌いな人や不快な人を手伝うふりをして、陰でその人の仕事を妨害する（項目16）」、「嫌いな人や不快な人を困らせるために、人前でその人が答えられない質問をする（項目4）」といった間接的に他者の業務を妨害する行為や他者を批判する行動が高い因子負荷量を示したため、「妨害・批判」因子と命名した。第2因子は「嫌いな人や不快な人に出会ったら、意図的にその人から離れようとする（項目9）」、「嫌いな人や不快な人とは、その人が自分と連絡を取り、近況を知りたがっていると分かっていてもつながりを切る（項目10）」といった他者を遠ざけることによって敵意を示す行動が高い因子負荷量を示していた。原版PASの“avoiding or ignoring”因子に含まれる項目と全く同じであったため、こちらの因子名を日本語訳した「回避・無視」因子と命名した。

Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、「妨害・批判」 $\alpha=.95$ 、「回避・無視」 $\alpha=.88$ であり、十分な内的一貫性が確認された。適合度は $\chi^2=740.79$  ( $df=134, p<.01$ ), CFI=.93, RMSEA=.08, SRMR=.08となり、3因子構造のものよりも若干の上昇を示した。一方、モデル間のカイ二乗差の検定を行ったところ、両モデル間に有意差が認められた ( $\Delta\chi^2 (50) = 250.50, p<.001$ )。

**基準関連妥当性の検討** 原版通りの3因子構造を仮定した日本語版PASと、新たに分析した2因子構造を仮定したものそれぞれについて各変数との相関分析を行った (Table 3)。

3因子構造、2因子構造のいずれも、項目全体及びすべての下位尺度が「間接的攻撃」とやや強い正の相関を示し、「受動的攻撃性パーソナリティ障害」と「未熟な防衛機制」とは中程度の正の相関を示した。

**再検査信頼性の検討** 本調査の回答者のうち465名（男性228名、女性237名、その他0名；平均年齢 $45.4 \pm 13.4$ 歳）の5か月後のデータを用いて再検査信頼性を検討した。各下位尺度のCronbachの $\alpha$ 係数を算出し、相関分析を行ったところ、3因子構造版では「批評の誘発」( $\alpha=.93, r=.56, p<.01$ )、「回

「避・無視」 ( $\alpha=.88, r=.52, p<.01$ )、「サボタージュ」 ( $\alpha=.93, r=.53, p<.01$ )、2因子構造版では「妨害・批判」 ( $\alpha=.93, r=.57, p<.01$ )、「回避・無視」 ( $\alpha=.88, r=.52, p<.01$ ) となった。

Table 3 妥当性検証項目との相関分析の結果（3因子版・2因子版）

	間接的攻撃	受動的攻撃性 パーソナリティ障害	未熟な防衛機制
<b>3因子版</b>			
項目全体	.69 **	.59 **	.56 **
批評の誘発	.60 **	.52 **	.52 **
回避・無視	.55 **	.47 **	.40 **
サボタージュ	.62 **	.53 **	.51 **
<b>2因子版</b>			
項目全体	.69 **	.59 **	.56 **
妨害・批判	.61 **	.53 **	.52 **
回避・無視	.55 **	.47 **	.41 **

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

**原版データとの国際比較** 原版が作成された韓国との間の文化差の可能性を加味して、Lim & Suh (2022) の408名（男性172名、女性236名）のデータとの比較分析を追加で行った。国籍と年齢を独立変数、項目全体と各下位尺度を従属変数とした2要因分散分析を行ったところ、3因子構造版では「批評の誘発」においてのみ交互作用有意 ( $F=3.39, df=3(1104), p=.02$ ) となった。多重比較検定の結果、国籍においては日本と韓国の間 ( $t=3.44, df=1104, p=.00$ )、年齢については30代と50代以降の間 ( $t=2.70, df=1104, p=.04$ ) にそれぞれ有意差がみられた。2因子構造版では有意な交互作用は認められず、「妨害・批判」においてのみ年代の単純主効果有意 ( $F=2.98, df=3(1104), p=.03$ ) となった。多重比較検定の結果、年代について30代と50代以降の間 ( $t=2.72, df=1104, p=.04$ ) に有意差がみられた。

## 考察

**尺度の因子構造と信頼性の検討** 原版に沿った3因子構造の確認的因子分析の結果、原版と同様の因子構造と、ある程度の適合度指標の値、内的一貫性の数値が得られた。しかし、3因子構造では「批評の誘発」と「サボタージュ」の因子間相関がかなり高かったことから、あらためて確認的因子分析を行い、新たに2因子構造を抽出した。2因子構造では3因子構造よりも高い適合度指標の値と十分な内的一貫性の数値が得られた。ただし、カイ二乗差の検定の結果からは、3因子構造の有意性も否定できなかった。

**妥当性の検討** 妥当性検証項目との相関分析の結果、日本語版PAS3因子構造版、2因子構造版のいずれも、すべての妥当性検証項目と中程度からやや強い有意な相関を示した。3因子構造版、2

因子構造版の両方とも、基準関連妥当性は十分に担保されたといえる。

「間接的攻撃」との相関は比較的高い値であった。秦（1990）によれば、「間接的攻撃」の項目は嫌いな人に対して不当な扱いや自分の罪を人のせいにするような間接的攻撃と、嫌なことを頼まれてもいいかげんなやり方をするとか、威張った人に反抗的な態度を示すといった反抗的攻撃の2つを合わせたものである。ここから日本語版PASの項目が直接的な対峙を避けて消極的に敵意を示すという受動的攻撃行動の特性を測定できているといえる。

「受動的攻撃性パーソナリティ障害」との相関は中程度の値であった。「受動的攻撃性パーソナリティ障害」の項目は「ものを置き忘れて非常に困る」「すぐに決心がつかないために、よく損をする」といったように、回答者の日常での困り感を測定する項目がいくつか含まれていた。使用した項目は受動的攻撃を測定するために独自に作成されたものではなく、MMPIから受動的攻撃性パーソナリティ障害に関連する項目を選択して構成されたものである。そのため、受動的攻撃を行動ベースで測定するPASとは、中程度の相間にとどまったと考えられる。

「未熟な防衛機制」との相関も同様に中程度の値を示した。「未熟な防衛機制」の項目は「不愉快な事実を、それがまるで存在しないかのように無視する傾向がある、と人から言われる」、「実生活でよりも空想上で満足を得ることが多い」、「現実の生活においてよりも空想において物事をやり遂げる」というような、否認や自閉的空想といった他者を介在しない防衛機制にあたる項目が多く含まれていた。そのため、他者への攻撃という側面が強いPASの項目との相関は中程度にとどまったと考えられる。

**原版データとの比較** 原版のデータとの比較分析の結果、3因子構造版では「批評の誘発」においてのみ、日本は韓国より有意に得点が高い結果となった。また30代は50代以上と比べて「批評の誘発」という形で受動的攻撃行動を取りやすいという結果が得られた。一方、2因子版では「妨害・批判」においてのみ年代の単純主効果が示され、国籍による差は示されなかった。

2因子版では国籍による有意な差が示されないにも関わらず、原版PASと日本語版PASでは因子構造が変化したことは注目すべきことである。日本語版PASでは原版における「批評の誘発」と「サボタージュ」の因子間相関が高くなり、1つの因子に収束した。要因の1つとして、これら2因子の項目には行動の目的の有無が影響していると考えられる。例えば「嫌いな人や不快な人を困らせるために、わざともたもた仕事をする（項目15）」、「嫌いな人や不快な人を手伝うふりをして、陰でその人の仕事を妨害する（項目16）」では、その行動を取ったことによって期待する結果が明記されている。対して「回避・無視」因子の項目は「嫌いな人や不快な人とは、わざと目を合わせないようにする（項目8）」、「嫌いな人や不快な人は、無言でやりすごす（項目12）」のように、記載内容は行動や怒りの表現方法にとどまっている。そのため日本語版PASでは原版のような受動的攻撃行動の種類ではなく、攻撃の意図や目的の有無によって区別された因子構造となった可能性がある。

2因子版での新たな日本語版PASについて 上記のように原版通りの3因子構造での日本語版PASを検討した結果、ある程度の信頼性、妥当性が確認された。しかし「批評の誘発」と「サボタージュ」の間に高い因子間相関が示され、構造への疑問が生じたため新たに2因子構造の尺度を考案した。因子構造が変化した要因として、日本語版PASは攻撃行動の種類ではなく、攻撃行動の目的の有無で分類された可能性が挙げられる。本研究で示された新たな2因子構造には、日本人に特徴的な受動的攻撃行動が表されていると考えられる。

第1因子の「妨害・批判」は遠回しに他者を貶めたり、不快な人との業務をわざと遅らせたりするなど、敵意や不満を示す対象が存在する、ややあからさまな行動である。木野（2000）は日本人が選択しやすい怒りの表出方法の1つとして、「自分が怒っていることを冗談っぽく言う」のように“遠回し”に表現する方法があるとしており、「妨害・批判」因子の項目に挙げられるように怒りを婉曲に示すことは日本人に特徴的な表現方法と考えられる。さらに、「嫌いな人や不快な人の恥ずかしい出来事や暗い過去を意図的に暴露する（項目3）」や「嫌いな人や不快な人を困らせるために、わざともたもた仕事をする（項目15）」などは、自身の名声や評判が落ちることも厭わないような行動とも捉えられる。Cason et al. (2002)によると、日本人は米国人と比較して、自己の取り分を減らしてまで相手の取り分を余計に減らす「スパイク（いじわる）行動」（西條, 2005）を取りやすい傾向にあり、「妨害・批判」は日本人に顕著にみられる受動的攻撃の形であることが示唆される。

一方で第2因子の「回避・無視」は非明示的な行動であり、敵意が見えにくい。この因子には「嫌いな人や不快な人は、無言でやりすごす（項目12）」「嫌いな人や不快な人にSNSで質問をされたら、はなからその質問を見てないふりをする（項目13）」といった、相手の存在を否定する行動が含まれる。このことは一見すると衝突を回避した平和的なコミュニケーションであるが、その裏で相手に大きな不安や不信感、無力感を与えることを可能にすると考えられる。さらに、敵意を言及された時には「返信を忘れていた」などと言い逃れすることができ、自身を不利な状況に置かずに相手を攻撃することができるため、非常に狡猾な表現方法といえるだろう。このような怒りの表現方法を成り立たせるものの1つに日本の高コンテクスト文化が挙げられる。Edward, T (1976 岩田・谷訳 1993)は日本文化を「高コンテクスト型」の文化と位置づけ、非言語的表現を用いたコミュニケーションが重要な役割を果たしているとした。短いメッセージの中からさまざまな物語を読み取る日本の文化が、非言語的で消極的な怒りを読み取ることを手助けしているからこそ成り立つ怒りの表現方法なのかもしれない。

## 結論

本研究では新たに2因子版の日本語版PASを作成し、原版の3因子構造と比較しながら信頼性と

妥当性、因子構造を確認した。2因子構造と3因子構造のどちらのモデルがより高い適合を示すかどうかについては、今後の追試でさらに検討する必要がある。また項目内容を精査し、他の攻撃性を測定する尺度やテストを組み合わせるなどして、複合的な手段で受動的攻撃を測定可能かどうか、検討を続ける必要があるだろう。

日本語版PASの項目内容を精査すると、「嫌いな人や不快な人を手伝うふりをして、陰でその人の仕事を妨害する（項目16）」、「嫌いな人や不快な人と一緒に仕事をするとき、意図的に自分の役割を果たさず損害を与える（項目17）」など、読み手にはあからさまな攻撃行動とも捉えられる文言が含まれていた。本尺度は受動的攻撃のみでなく、非言語的攻撃や大きなくくりとしての単純な攻撃性を測定している可能性がある。片田（2012）は、受動的攻撃では抑圧された怒りがひそかに表現されると説明している。また、齊藤（2010）はひきこもりに至るパーソナリティ傾向の1つの受動的攻撃性として、「指示に対する不従順」や「努力の拒否」を挙げている。このように本来の受動的攻撃は、相手からは意図していない結果のようにも見える失念や不参加、消極的な態度に表れる、より分かりにくい怒りの表現手法も含まれる。今後も日本人特有の受動的攻撃行動について他国との比較を重ね、検討していく必要がある。また、項目表現について、本研究では大学生という偏りのある集団を対象に調査を行った。幅広い年齢層に調査を行い、誰にとってもわかりやすいような表現になるよう、項目内容を見直していく必要もあると考えられる。

本研究は、DSM-IV-TR「今後の研究のための基準案と軸」において提案されている受動的攻撃性パーソナリティ障害は大人でのみ考慮すべきという見解（American Psychiatric Association, 2000 高橋・大野・染矢訳 2004）に合わせて成人を対象に質問紙調査を行ったが、回答者の職業や配偶者の有無などの生活環境や社会的立場、受動的攻撃行動を取る場面などを考慮していなかった。状況や場面に関連して取られる受動的攻撃行動は異なることが予想されるため、今後は回答者の条件を統制し、受動的攻撃行動の生じる場面や行動内容についても検討することが望まれる。さらに、臨床場面での応用を目指して、臨床群と非臨床群を対象とした調査や臨床的妥当性の検討も必要であると考えられる。日本語版PASを臨床的な問題の理解や改善に役立つものとしてさらに改良していくことが今後の課題である。

## 引用文献

- Allen, J. J. & Anderson (2017). Aggression and Violence: Definitions and Distinctions. The Wiley Handbook of Violence and Aggression, 1-14.
- American Psychiatric Association (1952). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders* American Psychiatric Association.
- American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders* American Psychiatric Association.

- Disorders Text Revision* (4th ed.) American Psychiatric Association (高橋 三郎・大野 裕・染矢 俊幸 (訳) (2004) *DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル* (新訂版) 医学書院)
- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders* (5th ed.) American Psychiatric Association. (高橋 三郎・大野 裕 (監訳) 染矢 俊幸・神庭 重信・尾崎 紀夫・三村 将・村井 俊哉 (訳) (2014) *DSM-5精神疾患の診断・統計マニュアル* 医学書院)
- Andrews, G. & Singh, M. & Bond, M (1993). The Defense Style Questionnaire. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, 181 (4), 246-256. <https://doi.org/10.1097/00005053-199304000-00006>.
- Baykara, S. & Alban, K. (2018) The Relationship Between Self Harming Behavior, Suicide Attempt History and Defense Mechanisms in Patients with Opioid-Use Disorder. *The Journal of Psychiatry and Neurological Sciences*, 31, 265-273. <http://dx.doi.org/10.5350/DAJPN2018310304>.
- Bond, M., Gardner, S.T. & Christian, J. (1983). Empirical study of self-rated defense styles. *Archives of General Psychiatry*. 40, 333-338. <https://doi.org/10.1001/archpsyc.1983.01790030103013>.
- Buss, A. H., & Durkee, A. (1957). An inventory for assessing different kinds of hostility. *Journal of Consulting Psychology*, 21 (4), 343-349. <https://doi.org/10.1037/h0046900>.
- Bushman, J. & Graig, A. A. (2001). Is It Time to Pull the Plug on the Hostile Versus Instrumental Aggression Dichotomy? *Psychological Review*, 108, (1), 273-279. <https://psycnet.apa.org/doi/10.1037/0033-295X.108.1.273>
- Cason, T. N., Saijo, T., & Yamato, T. (2002). Voluntary Participation and Spite in Public Good Provision Experiments: An International Comparison. *Experimental Economics*, 5 (2), 133-153. <http://dx.doi.org/10.1023/A:1020317321607>.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722. <https://doi.org/10.1111/j.1467-8624.1995.tb00900.x>.
- Edward, T. H. (1976). *Beyond Culture, Garden City, N.Y.:Anchor Press* (エドワード・T・ホール, 岩田慶治・谷泰 (訳) (1993). 文化を超えて TBSブリタニカ)
- 秦一士 (1990). 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究, 61 (4), 227-234. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.61.227>.
- Hong, K. & Roh, A. (1983). The effects of assertive training on the reduction of aggression and

- anxiety in juvenile delinquents. *Korean Journal of Clinical Psychology*, 4, 19-31.
- Hopwood, C.J. & Wright A, G, C. (2012). A Comparison of Passive-Aggressive and Negativistic Personality Disorders. *Journal of Personality Assessment*, 94 (3), 296-303.
- 稻田 尚子 (2015). 尺度翻訳に関する基本指針 行動療法研究, 41 (2), 117-125.  
[https://doi.org/10.24468/jjbt.41.2\\_117](https://doi.org/10.24468/jjbt.41.2_117).
- 片田 珠美 (2012). なぜ、「怒る」のをやめられないのか－「怒り恐怖症」と受動的攻撃－ 第3版 光文社.
- 木野 和代 (2000). 日本人の怒りの表出方法 心理学研究, 70 (6), 494-502.  
<https://doi.org/10.4992/jjpsy.70.494>
- Lagerspetz, K.M.J., Björkqvist, K., & Peltonen, T. (1988) Is indirect aggression typical of females? Gender differences in aggressiveness in 11- to 12-year-old children. *Aggressive Behavior*, 14, 403-414.  
[https://psycnet.apa.org/doi/10.1002/1098-2337\(1988\)14:6<403::AID-AB24801406023>E3.0.CO;2-D](https://psycnet.apa.org/doi/10.1002/1098-2337(1988)14:6<403::AID-AB24801406023>E3.0.CO;2-D)
- Lim, Y. O. & Suh, K. H. (2022) Development and Validation of a Measure of Passive Aggression Traits: The Passive Aggression Scale (PAS). *Behavioral Sciences*, 12 (8), 273. <https://doi.org/10.3390/bs12080273>.
- Maniaci, M. R. & Rogge, R. D. (2014). Caring about carelessness: Participant inattention and its effects on research. *Journal of Research in Personality*, 48, 61-83. <http://dx.doi.org/10.1016/j.jrp.2013.09.008>.
- 増田 真也・坂上 貴之・森井 真広 (2019). 調査回答の質の向上のための方法の比較 心理学研究, 90 (5), 463-472. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.90.18042>.
- McWilliams, N. (1994) *PSYCHOANALYTIC DIAGNOSIS Understanding Personality Structure in the Clinical*. Guilford Press, Guilford Press (マックワイアムズ, N. 成田 善弘 (監訳) 神谷 栄治・北村 婦美 (訳) (2005). パーソナリティ障害の診断と治療 創元社)
- Millon, T. (1993). Negativistic (Passive-Aggressive) Personality Disorder. *Journal of Personality Disorders*, 7 (1), 78-85. <https://psycnet.apa.org/doi/10.1521/pedi.1993.7.1.78>
- Morey, L.C., Waugh, M.H., & Blashfield, R. K. (1985). MMPI Scales for DSM-III Personality Disorders: Their Derivation and Correlates *Journal of Personality Assessment*, 49 (3), 245-251.  
[http://dx.doi.org/10.1207/s15327752jpa4903\\_5](http://dx.doi.org/10.1207/s15327752jpa4903_5).
- MMPI新日本版研究会 (1993). MMPI新日本版 三京房.
- Murphy, C. M., & O'Leary, K. (1989). Psychological Aggression Predicts Physical Aggression in

- Early Marriage. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 57 (5), 579-582.  
<https://doi.org/10.1037//0022-006x.57.5.579>.
- 中西 公一郎 (1998). 日本での防衛機制研究のために The Defense Style Questionnaire 日本語版 (DSQ42) – 日本での防衛機制研究のために – 慶應義塾大学社会学研究科紀要, 47, 27-33.
- Park, B., Kim, J., Roh, J., Ahn, C., Shin, D., & Park, Y (1991). Structural analysis of the MMPI scales for personality disorders and the 16 PF: A preliminary validation study of scales for personality disorders. *Korean Journal of Clinical Psychology*, 10, 55-75.
- Parrott, D. & Giancola, P (2007). Addressing “The criterion problem” in the assessment of aggressive behavior : Development of a new taxonomic system. *Aggression and Violent Behavior*, 12 (3), 280-299.
- Pretzer, J.L., & Beck, A.T. (1996). A cognitive theory of personality disorders. *Major Theories of Personality Disorder (2nd ed.)*, The Guilford Press. 43-113.
- 西條 辰義 (2005). 日本人は「いじわる」がお好き?! 経済セミナー, 611, 46-53.
- 齊藤 万比古 (2010). ひきこもり新ガイドラインについて（講演録）ひきこもり支援者読本, 内閣府 子ども若者・子育て施策総合推進室, 125-144.
- Schanz, C. G., Equit, M., Schafer, S. K., Kafer, M., Mattheus, H. K., & Michael, T. (2021). Development and Psychometric Properties of the Test of Passive Aggression. *Frontiers in psychology*, 12. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.579183>
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- VandenBos, G. R. (2007). APA dictionary of psychology. American Psychological Association.(ファンデンボス, G. R. (監修) 繁栢算男・四本裕子 (監訳) (2013). APA心理学大辞典 培風館)
- Wild, D., Grove, A., Mardn, M., Eremenco, S., McElroy, S., Verjee-Lorenz, A., & Erikson, P. (2005). ISPOR Task Force for Translation and Cultural Adaptation, Principles of good practice for the translation and cultural adaptation process for patient – reported outcomes (PRO) measures : Report of the ISPOR Task Force for Translation and Cultural Adaptation. *Value Health*, 8, 94-104.  
<http://dx.doi.org/10.1111/j.1524-4733.2005.04054.x>